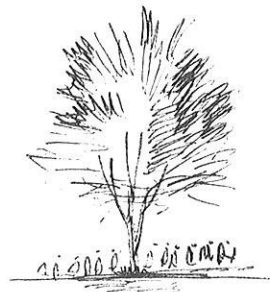


光の子



No.65 1996. 3. 1.

● 賜物を生かして互いに仕えなさい（ペテロの第1の手紙第4章10節）



「えんそくに行きました」

え・中島英子

光の子

大空の春につつまれ光の子

うららかやべそをかきたる挿し絵の子

あたたかき光となりぬ影もまた

大利根の水より生まれ風光る

風の子が青きを踏んで光の子

かなしみを知る子あしかび知らざる子

光よりあまねく血よりあたたかく

落合 水尾 (浮野主宰)

復活を信じる

コリントの信徒への手紙 第一 第15章19節

この世の生活でキリストに望みをかけているだけだとすれば、
わたしたちはすべての人の中で最も惨めな者です。

理事長 福島 勲

長野県小布施町にあるお寺岩松院の天井に、葛飾北斎が八十八才で、描いた鳳凰の絵がある。

畳二十一枚の大きさに、寝ころがってみるとよく見える。

この住職がこの絵の中に百五十年後、初めて発見した富士山の隠し絵がある。そして北斎は今日の宇宙船を予言しているという。

果たして北斎がそのような意味をこの絵に託して描いたものなのか、それとも住職が予言者のまなこでこの絵を読みとったのであろうか。

おおよそ古代の文化や芸術の価値や位置づけが、これを見る者によって大きく左右される。

読みが浅くって真意を把握できない、深く読みすぎて過剰評価をしてしまう。物自体と認識の問題がある。聖書の解釈にも同様な問題を感じることがまある。

昭和十年ごろ、東京本郷にあった小さい教会の日曜学校で、復活節に沖野岩三郎牧師が話された。

沖野牧師は明治学院の神学部出身で、和歌山県の新宮の教会に赴任した。時あたかも幸徳秋水らの大逆事件があつて、沖野牧師も疑われて特高警官につけまわされた。

牧会が困難になり、上京して文筆生活にはいった。

イースターの子どもたちへの話は仲たがいをしていた友だちと仲直りをするというものだった。

若かった私は、そんなことがイエスの復活の本意ではないと、いささか不満であつた。

沖野牧師はユニテリアン（三位一体の神を信ぜず、神はただひとりであり、キリストは偉大な宗教人とする一派）であると言われている。

ユニテリアンはキリスト教の主流ではなく、アウトサイダーである。

しかし、沖野博士の家庭での生活は朝ごと礼拝を守り、敬虔に祈りを捧げていた。

このような人を神はどう扱われるのか、私は知らない。

元満州鞍山の教会に、河合篤叙という老人が時折り出席していた。

救世軍の士官だったころ、東京神田の路傍で伝道して（野戦）山室軍平を導いた。松江の中学時代、昭和の初めの総理大臣若槻礼次郎と同級だったと言っていた。

この老人が復活節の祝会で証言した。彼が中学四年生のとき、病気で死に、棺に納められた。ところが幾時間か経って蘇生して棺を叩き起き上がった。

自分のようなものでも生き返ったのだ。神の子イエスが甦られるのは

当然だと証した。

この証言は傍証である。あるいは逆だと言わねばならない。キリストの復活を知り、それによって自分の甦りを知らされるのである。

体験は人をして確信に導く。

使徒パウロにしても、ダマスコへの途上、甦りのイエスに見えた体験が、彼をして世界の果てまでとの伝道にかり立てたのである。

そして、たとえキリストに望みをかけたとしても、甦りがなければキリスト者は、この世で最も惨めな存在であるという。（第一コリント十五・十九）

この惨めさはひとりキリスト者にとどまらず、全人類に及ぶ。

この世でのわれわれは、すべておぼろげに見えている。知るところも一部分に過ぎない。

誤解があり、傷つけ合い、愛を失って殺害に至る。未解決のままの人生である。

救われたというキリスト者のわれわれ、義と認められたのであって、義そのものになったというのではない。信仰の内容、教義についても全きものではない。

甦りの世界で、人生の秘められた謎がすべて解明される。（本誌四十一号の拙文と併読ください）

エッセイ

形見の絵の具

先日、H先生の御息の方から、H先生の形見の品をいただいた。

H先生は私の中学一年の時の美術の先生である。そして、その後の私の人生においても恩師と呼べる方である。その為、そのいただいた形見の品が、一層ありがたいものとして受け取れたわけである。

形見の品は次の様なものである。

油絵の具四十本、キャンバス六枚、ポピーオイル、リンシードオイル各中ビン一本ずつ、絵筆十本。

先生は、八十五・六才まで生きられた方だが、恐らく、これらの絵の具類を見ると、亡くなるまで絵を描く意欲を持ち続けておられたものと思われる。多少体調を悪くされた時には、恢復したらあの風景を描こう、あの花を描こうなどと思っておられたに違いない。そして、いつでも絵に取りかかれるように、材料を揃えて置かれたのである。

しかし、その意欲にもかかわらず先生は亡くなられてしまった。もう、その絵の具も筆も使う人はいない。そこで、それらの一部が私の所にとどけられたのである。

先生の昔の教え子の中には、私などよりはるかに優れた方々が多い。

しかし、その遺品の一部を私も頂けた事に、私は胸が熱くなる思いである。私は幸運にも先生から大事にされていったんだ、そして、第三者からそれがわかっていったんだと、改めて考えてみるとこんな嬉しい事はない。

私は、キャンバスや筆と一緒に、絵の具の入った小さな段ボールの箱の上に、黄色い菊の花を一本置いて、手を合わせた。

中学一年生の私達は、美術をH先生に教わった。ある時、友だちをモデルにして人物画を描いた。画面の中への人物の納め方、鉛筆の使い方などを教わった。今になって思うと、人物デッサンなのだが、もち論、デッサンなどという言葉は知らなかった。鉛筆は3Bか4Bを使うこと、消しごむはやたらに使わないこと、そして、うすい線で書き始めて形を修正していくことなどと、いろいろなことを教わった。今、私が初心者に鉛筆デッサンの助言をする時、H先生からあの時教わったのと全く同

じ事を言っている事に気付く。

絵というものは、うまくても下手でも良い、対象物をよく観察して根気強く描くことが大切だ、観察というのは、ボンヤリ眺めることではない、そんな風に言われた。中学生の私は、先生の言われた通り根気強く描き続けた。我ながらうまく描けたと思った。ところが、先生はうまいとはおっしゃらなかった。「とても根気良く描けている」と、みんなの前ではめてくださった。このことで私は、絵の描き方だけでなく、別な深いものを教わったのである。

中学二年生になると、美術はS先生に変わった。私が決定的に大きな影響を受けたS先生も、何とH先生の教え子であつた。そしてS先生も、H先生を尊敬しておられるのである。

今にして思えば、私は幸運であつた。先生に本当に恵まれた。私が自分で選んだのではないが、幸運な巡り合わせをいただいていたのである。

ところでこの間、これとは正反對のいやな事件を耳にした。どこかの大学生が、授業だか論文だかに対する教授の評価に不満を持って、教授

県立高校美術教諭 中島 陸雄

になぐりかかったというのである。この事は、先生も不幸だが、それ以上で学生が不届きであり、不幸である。また、最近、中学生や高校生のいじめが問題になる時、必ずと言っていい程、教師と生徒との信頼関係がどうのこうのと言われ、保護者と学校とのコミュニケーションがどうのこうのと言われる。悲しい世の中になってしまったものだ。

でも、幸いにして私には、成長するそれぞれの段階で尊敬できる先生がいてくださった。必死になって尊敬できる先生を持っていたのだ。これは神佛に感謝しなければならぬと思う。

ところで私のこれからだ、あのキャンバスにどのような絵を描くかが大問題である。いかげんな絵でも描こうものなら、H先生から「もっとしっかり観なくちゃだめだね、もっともっと根気強く描かなければね。」と叱られてしまうかも知れないのだ。



前は免疫系の働きなしには私たちは生きていられないことについて触れた。ところが、逆に免疫力を私たちが持っているために罹ってしまった病気もあると申し上げると驚かれるだろうか。

皆さんの中には

仙道 富士郎

山形大学医学部教授

命を守るしくみ(2) 両刃の剣

学者もどきのつづき ②⑩

春先になると花粉症に悩まされる方も多いと思うが、あの花粉症は、私たちが免疫力を持っている必要はない。いのちを守るしくみが逆に私たちに害を及ぼすことの矛盾がどこから来るのかまだよく解っていないが、免疫系が過剰反応を起こした結果が、花粉症であることは確かである。

つまり、まさに「過ぎたるは及ばざるがごとし」なのである。

花粉症に悩んでいる方には申し訳ないが、花粉症で死に至ることはないからまだしも、これが蜂に刺された場合のショック死やいわゆるベニシリシヨックによる死亡も花粉症

と全く同じ原理で発症するわけで、いのちを守るしくみが逆にいのちを脅かすことをご理解いただけたと思う。

以上説明したような免疫学的過敏反応のことをアレルギーと呼ぶことはご存じの方も多いと思うが、私たちは免疫学の専門家の間では、これを発症機序の違いから、四型に分類する。前記のものはすべてI型（いちがた）アレルギーに属し、同じ型のものとして、さらに喘息やじん麻疹などがあげられる。じん麻疹と喘息、更にベニシリシヨックなどずいぶんと違うように見えるが、反応が起きる臓器や組織が違うだけで、発症の原理は同じだと考えられている。犯人は血液の中にごく微量含まれているIgEと呼ばれる物質である。私たちの体に細菌やウイルスなどが侵入すると免疫系はそれに反応して、侵入した細菌に選択的に（免疫学では特異的という言葉が使用される）付着してその細菌を殺してしまいう物質を産生するが、それらをまとめて抗体と呼ぶ。アレルギーを発症させる前記のIgEもこの抗体の仲間なのである。ここまで来ると、免疫は両刃の剣で、一方では生体を外界の侵襲から守る働きをしているが、他方では生体に害を及ぼす作用もある

ることを実感していただけることと思う。

このIgEを発見された研究者は日本人で石坂公成・照子夫妻であるが、残念なことに日本ではなくアメリカでこの発見をされている。ちなみに免疫学の研究でノーベル賞を受けた利根川進氏もスイスでの研究が受賞の対象となっている。わが国の研究の土壌が独創的な研究を育て得るまで十分に肥沃なものにまだなっていないということか。

さて、免疫学は急速に進歩し、いろいろな病気の原因も次々に明らかになりつつあるが、免疫学を応用して病気を予防、治療しようとする困難な問題に出会うことが多い。

唯一、ワクチンによる感染症の予防が、免疫学の成果としてあげられるが、これとても、まだエイズの治療には成功していない。前述した死に至る危険性を秘めたI型アレルギーの治療については、まだ殆どお手上げの状態である。抗ヒスタミン剤という花粉症などの治療薬の名前を聞くとと思うが、あれは、IgEの作用で肥満細胞という筆者みたくな名前のついた細胞が刺激されヒスタミンというアレルギーの症状の一部を誘発する物質が産生されるが、この物質の作用を抑制するに過ぎず、いわ

ば対症療法剤であり、免疫の過敏反応全体をもとに復元するものではない。治療を困難にしている原因の一つとして、アレルギーを抑制しようと薬剤で免疫を抑制すると、それは生体防御機構をも弱めることにつながっていく、微生物に対する抵抗力を減弱させるという問題がある。IgEの産生を選択的に抑制すれば問題は解決する可能性も考えられるが、まだそのような方法は見い出されていない。

ところでI型アレルギーの患者は年々増加しているという。その原因を、慢性的な上気道感染症の減少や寄生虫感染症の根絶に求める学者もいるが、まだ本当の理由はいくつもない。いずれにしてもこの病気が環境の変化にもなって増加してきた、いわゆる文明病の一つであることは間違いない。

それにしても、余り他にいいことをしていそうもないIgEが私たちの体に存続している謎は解けない。あるいは、大昔にIgEは生体を守る大事な武器だったが、それが環境の変化にともなって、無用の長物になってしまったのかも知れない。

いのちを守るしくみは、そんなに堅牢なものではないことを知るべきであろう。

トムソーヤたちの朝

⑩

日本キリスト教団東京大宮教会

永野三恵

立春を過ぎると、光がやわらぎ、葉を全部落としてしまった木の枝々も、来るべき春への準備をもう始めている。土の中では、春咲く花々の芽も、むっくり顔を出している。

厳しい冬をじっと耐え忍び、春を待ち望む……。今、それを切実に願っているのは、高校や大学をめざしている若者ではないだろうか。

教会学校に通っている子どもたちのうち、光の子どもの家から四人の中学生が高校を目指している。「出来るならば逃げてしまいたい」そんな思いがする彼らであるが、その試練を引き受けていく中で、自分がどんなに弱い存在であるか知らされる。その経験を通して、彼らも確実に心豊かにされていくのだと思う。

春を秘やかに待っている人に、年

老いた人々もある。厳しい冬は年をとった者にとっては辛い。自分が何かでき、何かしてきた時代から、いろいろ出来なくなっていく自分を認め、生きていかなければならない。それは若い人が自分の人生模様をどのように織りなしていくかという苦労とは違った大変さを伴っている。

“DoingからBeingへ”と言われていて、存在していること自体に価値があるという事を頭では理解し認めることは出来るが、自分がその立場になったら、どんなに葛藤があるだろうか、今からわが姿を思うと、そんなにかっこよく言えない気持ちの方が正直いってする。まず、いろいろなことが出来なくなっていく自分を容認し、周囲の者がそれを認め支え合う中で、自分の生を確かめていかなければならない。そんな時、一番必要なのは、相手を思い合う愛ではないだろうか。自分が愛されている実感がなく孤独と不安の中で生活していかなければいけない。と、そんなことを思うと胸が痛くなってくる。

先日、私の叔母が八十才で亡くなった。

叔母は、三十才になる前に、僅か三年ばかりの幸せに満ちた結婚生活を、夫の戦死という時代の嵐に巻き

込まれ終るを得なかった。後に残されたのは彼の形見ともいふべきひとり娘のみだった。彼女は父の顔を見たことはなかった。しかし母と父との強い絆は、事あるごとに話され、叔母は再婚することなく、夫への想いと娘の成長に自分の生きがいをかけていった。辛い、戦後の混乱期も高校の英語教師として生き生きと生活できた。

ひとり娘は成長し、結婚して四人の子どもが与えられ夫と共に、今の時代としては古風と思われるほど密度の濃い家庭生活を営んでいる。ずっと独り暮らしをしていた叔母の体の具合がかなり悪くなり、検査、入院の後、「まだひとりで暮らせるから」という叔母の願いを聞き取れるだけ許し、もうこれ以上無理だろうと判断した段階で、東京の娘の家へ移った。そこでも孫たちにセーターを編み、針仕事をしていた。約一年間自分が出来なくなっていくいろいろなことを認めながら生活していた。そして先日、普段と変わりなく家族と夕飯を共にし、「さあ、お風呂に入って休みましょう」と、お手洗いにいったとき、気持ちが悪くなり意識がなくなり、家族の腕の中で静かに息を引き取っていった。何の苦しみも無かったその顔はとても美しく、今に

も語りかけそうに思えた程だった。苦労の多かった生涯だったが、最後が誰もがこうありたいと願うように、温かい家族に見守られ、自宅で亡くなったその事で、叔母の生涯は「幸せだったな」と思われる。

この叔母の死を通して、今一度家族の在り方を考えさせられた。ある評論家が「もっとお互いに世話をかけ、世話になることに遠慮しないでいきましよう」と言っていた言葉が妙に私の胸に残っている。世話になる、世話をかけるということは、それだけ濃密な人間関係が営まれることなのだ。

家族の絆がどんどん希薄になり、子どもたちへのひずみが出てきている中で、更に個人の個を追求していく生き方を求めていくシングルマザーという生き方も若い人をとらえている。しかし、旧いといわれるかも知れないが、私はやはり社会の基本的な単位である家族が温かい人と人との結びつきを持ったものとなり得るようになってほしいと願っている。

光の子どもの家で生活している子どもたちも、やがては結婚し、家庭を持つだろう。そんな時、彼らが今得ている職員の方々の温かい愛と祈りに応えることが出来る家庭を築いてほしいとも願っている。

プ・リ・ズ・ム

光の中で

佐藤家

毎日の暮らしの中で、楽しい時間よりも、つまらないと感じ、怒っている時間が多いことに気付く。

学生時代はこんなではなかった。心から笑っていることが多かったように思える。

人の役に立つ仕事を！と理想を描いて選んだ仕事である。しかし、役立っている実感はほとんどなく、かえって子どもの成長の妨げになっている存在のような気がする。私はここにいないべきでない人間とさえ思えてくる。

赤の他人同士の生活。親でも、兄弟でも、友人でもない、不思議な関係である。他人なのに、親にも、友人にも見せたことのない、自分を見せてしまうときもある。何ともいえない関係だ。

私は何のためにここにいるのだろうか。子どもに何かが出来るわけでは

もない。私に出来ることはここにいないことだけだ。

人生の中のここに在るほんの少しの時間を、子どもたちと共に楽しくできる様に努力している日々である。

「この世で最大の不幸は、貧しさや病ではない。むしろ、そのことによって見捨てられ、誰からも自分が必要とされないと感じること、最も恐ろしい貧乏は孤独です。」

マザーテレサ

小さな手においた、小さなどんぐりを、「あい」と、笑顔で渡してくれる、そんな時間を大切にしたい。

神田 幸枝



子どもたちの季節

仙道家

お正月が終わり三学期のはじめから、全職員の総力を挙げて生活の立て直しが始まった。

わが仙道家も、特に中・高生の生活がだらけてしまっていた。暮らしの中で最も大切な食事にみんなの顔が揃うことも少なくなっていたのだ。

朝食は、一番早く登校する小学生に合わせた時間である。その為菅原先生は、中・高生各々に、共に生活するという事は互いの都合を考慮してそれに合わせ、隣の人を思いやることなのだ、と、ていねいに話し、理解を求めていった。

まだ暗い朝早くから菅原先生も関わり、朝食からみんな揃って食べることが出来るようになった。

ある日の夕食の時、嗜好調査を思いつき、

「みんな何が食べたい？」

「ラーメン！」



「ステーキ！」と声があがる。

一志が、

「いくら丼！」といった。

「いくら？ひとり一粒くらいなら出来るかも。」と、答えると、

「ぶーっ」とふくれる。

環も発言する。

「そういえば最近ラーメン食べていないな。冷やし中華も。ソーメンも食べたいな。」すかさず一志が、

「ソーメンいいな。」と相づち。

ああ、何と季節感のない子どもたち！と嘆いていると、鈴木保母がアイスクリームを出してくれた。

「毎朝みんな一緒にご飯食べられるようになったご褒美。」と。

季節感のない子どもたちとアイスをなめて幸せな気持ちになった夕食であった。

池田 祐子

原田家日記

1 折り

遠目にも枯草色だった利根川の土手に緑色が目立ち始め、先日、子どもたちが菜の花をお土産に摘んでくれました。

残雪があちこちに見え、吹く風もまだ冷たいけれど、確実に春がやってきていることを感じます。

そして、誰よりも「春」を待ち望んでいるのは、高校受験を控えた加津子だろうと思います。

うちでは、大抵の子どもが公立高校の一本勝負です。これに落ちると就職しなければなりません。私たちとしても、このまま社会に出すわけにはいかないということで、最大限の協力をしようという気持ちだけは持っているつもりなのですが、なかなかそれを伝えられていません。

先日、最後の追い込みの学習をどうやっていくか、と家の皆で話し合いました。もちろん、加津子を中心に、です。応援したい、という思いを伝えてきたつもりでしたし、その話し合いでも、皆でそれを伝えました。が、彼女は学習をみてもというように最後まで抵抗を示し

ました。彼女なりの理由をもって「ノー」と主張したのです。

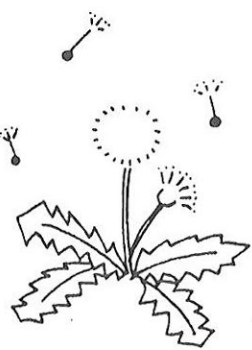
私は、少なからずショックでした。応援したいと手を差し出すこちらと、それを振り切ろうと拒否する彼女。この溝は、彼女との間にある溝は、何ということなのか。

彼女にとって、学習は決して楽しいものではなく、できれば避けて通りたい、最も苦手なことでした。

その一番弱いところを見せられない、そこに触れて欲しくないという関係しか創ってこなかった、その指摘が胸に堪えました。意識しないで、流してきた日常の恐さをこんな場面で知らされるのです。

彼女のために大勢の人が折り、応援してくれていることを伝えながら、「あなたのことが、とても大切」ということを伝えられるような日常を積み重ねていかなければ、と心から思うのです。

「春」を折りながら。岩崎まり子



河のほとり

旗井の家

二月八日、今日は県立高校の推薦入学試験の発表の日。

これまで、依頼心が強く楽な方に流れがちな子どもたちに、推薦という道を選ばなかった。

しかし、嬉は、三年間の陸上部での活躍が評価され、また、三年生になってからの真摯に努力する姿勢が誰からも認められ、学校から推薦したいという話もあって推薦入学を選んだ。

おせじにも社会性があるとは決して言えない彼が、「どうやったら頭が良くなるの？」と、行事に参加して下さった永野三恵さんへの問いかけがきっかけで、蓮田まで出かけて永野塾に通い学習を見ていただくことになったのだった。

他の学校の女子ばかりが集まる永野塾に、何よりも優先して通い続けた約一年間である。本家で行われる学習会にも、一日も休まずきちんと参加し、私が「勉強しなさい」と口にする必要は全くなかった。

彼は、部活という学習といい、ねばり強く目標に向い、道を求める者

のように為すべきことをやり遂げた。

二月二日の入試の二日前あたりからプレッシャーからか、神経をとがらせイライラする様子もあったが、当日は大の苦手の面接も、筆記試験も、実技のテストも思い通りに受けられ、手応えを感じていたようだ。

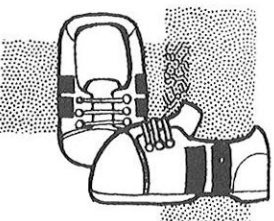
「大丈夫、絶対合格だよ！嬉が不合格なら誰も合格なんか出来ないよ」と、言いながらも、やはり結果が出るまでは不安であった。

そして、今日、合格の知らせを持って彼は笑顔で帰ってきた。

彼は、一つ人生の難関を努力という二文字では言い表せないほどの力を得て乗り越えた。人はこんなにも変わることが出来るんだということ、私にも見せつけてくれたながら、彼は今「大学」へ行きたいと言いつけている。

何の力も持たない私だが、彼が次の目標に辿り着くまで傍に居続けることを目標にしたい。

倉沢 智子



現場から

のびやかに ふくよかに

Ⅵ

笹山 恵理

厳しい寒さの中からふと春の兆しが見えはじめる今日この頃です。皆様にはいつも光の子どもの家をお思い下さり、感謝いたします。

さてわが担当になる三才の美季は日々体も心も成長していますが、そんな生活をほんの少しご紹介します。朝から上天気のある日の午後、小さな美季は玄関で掃除をはじめた職員の前で、いつもならその箒を取り上げて掃除をはじめはらずである。しかし、その日はちょうど靴を洗おうとして用意されていたバケツを見つけると、その中に入った靴とたわしを手に持ち靴を洗いはじめた。ゴシゴシとまるで大人の人がするのと同じように洗い出す。何気ない生活の中でのちょっとした動きでも何と子どもはよく見ているのだろう！と、いつつい感心してしまう。

『あーあ』というような顔をちょよとばかり見せ、美季は次なる行動を開始する。もちろん靴を干すのであるが、これがまた微笑ましいのだが、靴を洗う蛇口から少し離れたところまでトコトコと歩いて行って、大人がするのと同じように竹で作られた低い垣根に靴を引っかけたのだ。よく見ていること。そうやって一通り靴を洗ってしまうと、それで終わるかと思いきや、彼女の「お仕事」はまだまだ続く。美季は何を思ったか、履いている自分の靴を脱いで洗いはじめたのだ。暖かい日だといっても二月半ばである。まだまだ寒い。水浸しの中で靴を脱いだら風邪を引くのは当たり前だ。即「お仕事」を中止して美季を家の中へ入らせようかと思っただ、思いとどまり、別の靴を履かせた。本当は、足をぬらしながら「お仕事」をさせようか、その方がよいのでは、とも思ったのだが。美季の方は、足をぬらそうが、別の靴を履かせようがお構いなしで「お仕事」に熱中している。わざわざ脱いで洗った自分の靴まで洗い終わると、一回干した靴をま

た洗ったりしている。いそいそと働いて、それでもまだ飽き足らずに玄関に並んだ靴を持ち出しはじめた。『それはいけないよ』と美季の動きを私は止め、「お昼寝をしようか」と促すと、「まだ」と、美季は返事する。もう一度誘うと、彼女の「お仕事」はやっと終わるのだ。もし、もう少し近くで見えていたら、あれこれ口を出し、また中止させていただろう。少し離れた場所から見ているので、いつもと違う形でその行動をゆとりを持ってみる事が出来た。いつもは、近くに居すぎて見えないことの多い日常であった。私はいくつ美季の「お仕事」に気付かず邪魔立てしてきたのだろう。

バレンタインデーの二月十四日、家の男の子たちは皆チョココレートをもらいよい顔を見せている。美季の友でありライバルでもある二才の洋も大好きな岩崎保母からチョココレートをもらい片時も手放さず、持ち歩いていた。美季は、お菓子大好き人間である。けれども、特にチョココレートに執着の色もみせず昼が過ぎた。私は洗濯物を入れにベランダへ、洋はついうっかりチョココレートを事もあろうに美季の部屋においたまま外へ遊びにいってしまった。ひとり部

屋にチョココレートと共に残された美季。私が部屋へ戻ったときには後の祭。チョココレートの箱は部屋の隅に。さて、どうしたものか・・・

誰の目もない中で、チョココレートを横に、美季は少しは葛藤したのだろうか？ 三才の美季に「食べてはいけない」の理性は働く余地もなかっただろう。けれども悪いことは悪いことで叱ろうと私は決め、美季に、「チョココレート食べたの誰？」「ヒロ」「うそはつかないよ。チョココレート食べたの誰？」「カズチャン」彼女は次々に自分の友人の名を挙げ、逃れようとする。いくら聞いてもニヤニヤと笑い、「自分が食べた」と口にしな。人のものを食べてはいけない、ましてやこのチョココレートは洋の大事なものの・・・情に訴えても美季はうそを突き通す。美季は泣き、私は叫びながら十分ぐらい経っただろうか。

私は最終手段を使う。「みーちゃんのこと大好きだよ。抱っこもしたいし手もつなぎたいけど、うそつきのみーちゃんとは手はつなげない。」小さな子どもにとってこれは厳しすぎるほどの言葉であっただろう。次の私の「チョココレート食べたの誰？」に、「みーちゃん」と、やっと自分のしたことを認めた美季であった。

養護メモ 61

家族 その十五『情緒14』暮らし

菅原 哲男

庄一がまたお金を盗んでしまった。用事で事務所に来たら誰もいなく引き出しからとってしまったと言う。書記が出張だったので、うっかり引き出しに入れたと指導員は悔やんだ。「この前の事件がまだ片づいていないときになんだって・・・」担当保母は絶句した。「何が足りなくてお金をほしかったのかなあ・・・」と指導員。うつむきっぱなしの庄一。とったお金で買ったのは、何一つ魅力的なものはなく、テーブルの上に光を失って並べられていた。

「オレも何でだか・・・よく分かりません・・・」と、意外にはっきりした口調で言った。翌日、もうじきお盆休みに入ろうとしている時期だったが、所沢児童相談所に電話した。担当の老松福祉司にことの次第を伝え、このような子どもにどのように関わればいいのかを一緒に考えてほしいと頼んだ。以前から、児童相談所長や相談指導課長との懇談会などでも、長期在住の子どもの心理再判定の必要を訴え、実施を依頼してはあった。その午後、藤井相談指導課長が太い声で判定課の方の協力を得られたことを伝えてきた。石本管理課長などの心理判定のグループの全面的協力です。庄一は夏休みの二週間を児童相談所で、経過観察と再判定を受けた。

「お金をとってまでこんなものが必要だったんか？」「イヤ・・・」聞いただし、説明を求め数時間を費やした。しかし、庄一は、済みませんと言う謝罪の言葉をか細い声で繰り返すだけで、動機などについての明確な説明はなかった、というよりは出来ない様子であった。

「どうしてなんだろうな、こんなバカなことを間もおかずに繰り返すなんて・・・」と私も焦点ボケした頭を振って呟いた。すると、庄一が、

ものと思ひこんでいたのだ。

幼児だけだった開設当時から十一年の時間の経過の中で、心してきたつもりだったが、金品と寝てからのチェックは抜けてしまっていた。

昨年あたりから大半の子どもたちが思春期に入り、反抗や不安定を表現していた。

夏や冬などの長期の休暇の時期などは、職員たちが寝入った後、起き出して仲間と徘徊しゲームセンターなどへ出かけていたという。

どうも、その頃から子どもたちの朝がめちゃくちゃにだらしないようになってきたようだ。朝起こすと、ウルセエ、などと怒鳴る子どもなどが出てきて、男子の指導員なども殆ど手に負えなくなっていたらしい。

数年前から朝の実状を殆ど知らないでいた。それ程、職員を信頼していたと言えは格好いいが、その実私が一番たるんでいたのであった。

人の暮らしは保守的で、最初にものを置けばそこがそのものの置場所になり、心を置けばその人の心の置場所になっていく。

私たちが信頼し、スーパervアイ

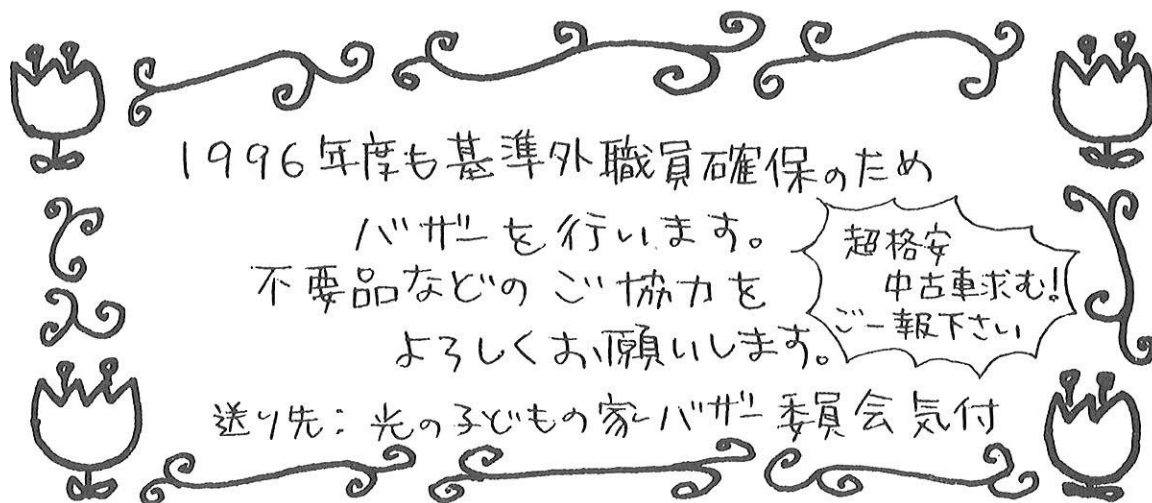
ズを受けている菅野クリニックの菅野圭樹博士に、境界例の子どもの相談をしている。先生は、その子どもを数週間預かって、朝起きて夜寝るまでの生活リズムの習慣化を訓練して下さった。

「どんな病気でも、生活リズムが正しくなると快方に向かう。どんな健康な人でも生活が乱れると不健康になり病気にさえる。」と、その子を連れて来られておっしゃった。

霊長類学者の河合雅雄は、人類の歴史は五百万年ぐらいで、その四九九年は狩猟採集の生活だ。農業と牧畜の生活はごく最近始まった、と言う。それにならえば、電気が生活に入ったのはついこの間のことに過ぎないのである。夜寝て昼活動するのは暮らしの基本なのである。

人の暮らしを彩るものとして喜怒哀楽がある。これは人の幸せを測る尺度と言える。そして、喜怒哀楽は感情であり、哀楽は情緒といえる。

基本的な生活のリズムを回復し、情緒的な手応えと幸せ感のある暮らしは、家庭である家族との関わりの中でこそつくられるものだろう。



日誌抄 = 暮らしの風景 =

1995年 12. 1 ▶ 1996年 1. 31

- 12月3日 第1アドヴェント。クリスマス準備に入る。
 7日 向後俊彦氏より野菜をどっさり。感謝。
 8日 県内の家庭訪問開始。正月を家族と一緒にと願って。
 10日 東大宮教会永野三恵氏多額のご寄付。大西基金へ。
 11日 越谷児童相談所より福祉司2名が情報交換に。
 15日 田中正博氏よりお菓子をたくさん。感謝。
 19日 大塚東一氏より苺をたくさん。ごちそうさま!
 ・江森ヘヤーサロンより散髪ご奉仕。ありがとう!
 20日 コカコーラボトラーズ社より清涼飲料を。感謝。
 22日 梅沢三保氏より図書券などお励ましを、たくさん。
 ・町内東婦人会が1円募金を今年も。伍井会長始め役員の方々がおいでになりたくさんの越年資金を。
 23日 東大宮教会CSクリスマス。
 24日 クリスマスイヴ。夕食をみんなで。聖書を読み、讃美歌を歌い、子どもたちへのメッセージを伝えるキャンドルサーヴィスを。夜遅く、子どもたちが寝入るとサンタクロースが枕元にプレゼントを!
 25日 メリークリスマス! 家族や学校の先生、教会やお友だちなど子どもたちが直接お世話になっている方々120名ほどをお招きしてクリスマス礼拝としてのページェント、そしてお祝いの会を。楽しく。
 26日 町内中島睦男先生来訪してお励ましを。
 27日 日本鏡餅組合より鏡餅をいただく。ありがとう。
 28日 お餅つき。みんなでついて、食べて・・・

- ・加須市立水深小学校よりオルガンをいただく。感謝。
 29日 お正月帰省始まる。父母や家族に手を引かれて。
 1996年1月1日。元旦礼拝を捧げ今年の守りと祝福を祈る。昨夜からの家族4名に全職員と半数以上の子どもたちで。第1食をお雑煮で。そしてお年玉も!
 5日 お正月気分をぶっ飛ばし今年もがんばろう会。恒例になった荒巻幸子さんの奇術と腹話術も。
 12日 元職員の板橋毅氏より埼玉県立高校入試問題集を。やっぱり覚えていてくださった。4名もの受験生を。
 14日 桶川市の向後俊彦氏より野菜をたくさん。感謝。
 16日 川越児童相談所山本福祉司来訪して情報交換と養育についての協議を。熱心に。ありがとう。
 18日 NHKの村上ディレクター来訪して数時間もの懇談。
 20日 中日ドラゴンズの愛甲猛選手よりチャリティコンペの益金と野球用具一式。中日スポーツに記事。
 24日 国際婦人福祉協会上條千鶴子氏来訪して視察と懇談。
 29日 所沢児童相談所より福祉司、判定員5名が来訪。養育などの協議、長期在住の子ども達の心理再判定を。

お陰様でこのように年を送り新年を迎えることが出来ました。この間、東洋英和女学院や、松岡亮子東京子ども図書館理事長を始め団体や個人など沢山の方々よりご支援が。心から感謝しつつ、お応えできる養育への決意を新たに。(智子)

/// ———— 反 射 光 ———— ///

☆朝六時、夜来のみぞれ雪が真っ白にした平野に日が昇り始め、それにつれてうっすらと霞が天地を満たしていく幻想的な景色の中を走ってきました。
 ☆今年から三名以上の子どもが中学を卒業する年が連続して六年間続きます。開設時の地元と非行前の幼児しか入所させないという理不尽な妥協で出来た団子状態の年齢構成がその時期に達したのです。思春期問題のデパートのような暮らしの風景が数年間続く理不尽です。☆目前に高校受験が迫った三名がプレッシャーに直面し、身体的訴えをする者、躁状態を募らせる者、イライラしてあちこちに衝突する者などそれぞれ向きの合い方をしています。そうやって人生の分岐点を初めて自らの選択によって乗り越えていきます。決して彼らの責任によるものではない理不尽な重量も重ね担いながら。☆そんな彼らを励まし伴走し続けるにふさわしい者でありたいと願ひ励みます。乞う、変わらぬご支援を! 伏して。(哲)